

# 『召しにふさわしく③』

'22/07/31

聖書箇所: エペソ人への手紙 4章 1-2節 (新約 p.377)

時々、クリスチャンに対して、このような…、間違ったイメージを持っている方がおられます、「クリスチャンとは、どんなことが起こっても決して怒ったり、また、人を非難したりしないのでしょ？」って…。いかがでしょう？ 皆さんもこれまでに、このようなことを考えたり、あるいは、言われたりしたことがないでしょうか？

## 命題: 神は、クリスチャンがどのように生きることを願っておられるのでしょうか？

確かに、聖書のみことばは、救われたクリスチャンたちに対して、「救われたのだから救われた者らしく…、つまりは、クリスチャンらしく、神とイエス・キリストにならって歩んでいきなさい！」と教えています。しかし、多くの人が持っている、クリスチャンに対するイメージが、いつも正しいものであるかと言うと、決してそうとは限りません。ひょっとしたら、私たちクリスチャンであっても、クリスチャンのイメージに関して、間違った理解を持ってしまっている可能性が有り得るのです。今日は、そういったことに関して、皆さんと一緒に学んでいきたいと思えます。どうぞ聖書をお持ちでしたら、エペソ 4:1-2 をお開きください。

今日もまた、私たちは、このエペソ 4:1-2 を通して、神様が私たちクリスチャンに対して、どのような歩みを願っておられるのか？ということをお学んでいきます。初めに、みことばをお読みします。

- 1 さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。
- 2 謙遜と柔和の限りを尽し、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、

## I・謙遜！(2節)

これは先週の礼拝で学んだことですが…、このみことばから最初に学んだポイントは、「謙遜」でありました。謙遜こそが、本当に救われた者が持っているべき態度・資質なのです。

今から2000年も前のこの当時…、謙遜というものは、現代の私たちがイメージしているような“美德”ではありませんでした。いえ、それどころか…、恐らくは、謙遜という考え方や言葉さえも無かったような時代であったと思われます。そんな中で、イエス様が教え…、実践してくださったのが、「自分のことよりも相手を思い、相手に仕える…」という態度でした…。アガペーの愛…、つまりは、神の愛の実践です。

自分が人に比べて劣っているから、人に仕える…、従順になるというではありません。私たちが、神様の前にちっぽけな…、卑しい存在であるから、神様と他の人との前でへりくだるのです。自分の弱さや罪深さというものを痛いほど理解しているから、自分を誇ろう！とは思わないのです。また何より…、イエス様という完璧な御方が、何の罪も…、何一つ責められる所も無い御方がへりくだって…、私たちの罪の罰を身代わりとなって受けてくださった…、私たちを救うために犠牲となってくくださったから、私たちも、その模範にならおうとするのです。それが先週の礼拝で学んだことでした…。

## II・柔和！(2節)

その次に、このみことばが教えてくれている内容・資質は、「柔和」であります。今日は、この「柔和」ということについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

### ●『柔和』という言葉の意味！

まず皆さんにお尋ねしたいのですが、皆さんは「柔和」と聞いて、どんなイメージを持っておられますか？ 皆さんなら、「柔和」という言葉を…、また、その性質をどう説明されますか？ ⇒まず、国語辞典で、「柔和」という言葉を引いてみると、「性質や態度などが優しくて、柔らかいさま。」と説明されておりました。…何だか、少し言葉の説明が抽象的で分かりにくいような感じがするのは私だけでしょうか？ まあ、しかし、いずれにしても、日本語の「柔和」という言葉は、「優しい、柔らかい…」というイメージで、何があっても決して怒ったりしないという…、初めに紹介したような、クリスチャンのイメージと、そう遠く無いように思えます。

しかし問題は、聖書が、「柔和」という性質について、どう教えてくれているか、ということですね！ 実は、ここで、『柔和』と訳されてあるギリシャ語の言葉ですが、これは、「プラウテース」(πραΰτης)という言葉で、実は、この言葉は、元々、「バランスのとれた中庸(=どちらにも偏っていないこと)」と言うか、「うまく調和が取れていること」を表わすような場合に使われた言葉なのです。…ちょっと、さっきの日本語の説明よりも難しくなっていましたね、…申し訳ありません。分かりやすく言うと、こういうことなのです。

まず、この言葉は、決して、「どんな時にも怒ってはならない！人を非難したりしてもいけない！」ということをお教えているわけではありません。…と言うよりも、怒るべき時に怒り…、人に注意すべき時にはしっかりと注意することであり…、それと同時に、怒るべきでない時には決して怒らず…、耐えるべき時に耐えるというような態度を、私たちに教えてくれているのです。つまり、そこには、完璧なバランスと言うか…、調和がしっかりと取れている、ということなのです。

だってね、皆さん。例えば、あのイエス様は、どうだったでしょうか？ どうか、先週も引用した、マタイ 11:29 を思い出してみてくださいませう？ マタイ 11:29、『わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。』⇒先週は、この、『へりくだっている』という言葉を取り上げましたが、実は、ここで、『心優しく(い)』と訳されてある言葉が、先程言った、「プラウテース」(πραΰτης)という言葉の形容詞形(πραΰς)なのです。当然、イエス様は、神であられ…、また同時に、私たちの救い主でもあられましたから、罪の無い御方です…。しかし、そのイエス様は、罪が全く無いというだけではなく、謙遜や柔和という点に関して、また、それ以外の如何なる点においても…、私たちの模範であられるのです。そうですよ！

じゃあ、そのイエス様は、ただの1度も怒られたり、また、人を非難されたりした時が無かったのでしょうか？ ⇒違いますよね！ 正直言って、そう多くはないですが…、イエス様が怒られた時って、何度かありましたでしょ？ イエス様も私たちと同じで、つい、カッとなってしまって、怒りをコントロールできなかったのでしょうか？ いいえ、それは違います…。ま、イエス様の例からも分かる通り、怒りという感情が全て間違っているわけはありません。また、「山上の説教」のみことばを学んだ通り、「人を裁く」というすべての行為が間違っているわけでもありません。先程見た、『柔和』という言葉の意味が、「バランスのとれた中庸、あるいは、うまく調和が取れていること」を指しているように、怒るべき時に怒る怒り…、つまり、正しい怒りというものがあるのです！ 私たちクリスチャンは、ただ…、何が何でも、どんなことも我慢して、ただひたすら、ニコニコしているべきかと言うと、決して、そういったようなことをみことばは教えているわけではないのです。

実は、ついさっき紹介した、マタイ 11:29 でイエス様がおっしゃった、『わたしは心優しく、へりくだっているから…』の、『心優しく(い)』という言葉の元々の意味なのですが…、これは、「よく訓練され、飼育慣らされた動物に対して使われる言葉」であったそうです。…そうしたことから、この言葉は、自分の本能や情熱などを正しく制御し、コントロールすること、つまり、「自制する」と同じような意味になっていったのだそうです…。

● イエス様の 模範 =4つの具体的例証！

では今から、私たちの模範であるイエス様の行動などを4つほど見ていくことによって、私たちがどういった時に怒るべきであり…、また逆に、どういった時に怒るべきでないのかということのガイドラインを…、つまりは、そういったことのヒントを、皆さんとご一緒に見ていきたいと思います。

①マルコ 3:1-6⇒心が 頑な な者、大きな罪 を犯そうとしていた者に対して…

どうぞ、まずは、マルコ 3:1-6 をご覧ください。『1 イエスはまた会堂に入られた。そこに片手のなえた人がいた。2 彼らは、イエスが安息日にその人を直すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴えるためであった。3 イエスは手のなえたその人に「立って真ん中に出なさい」と言われた。4 それから彼らに、「安息日にしてよいのは、善を行うことなのか、それとも悪を行うことなのか。いのちを救うことなのか、それとも殺すことなのか」と言われた。彼らは黙っていた。5 イエスは怒って彼らを見回し、その心のかたくなのを嘆きながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。彼は手を伸ばした。するとその手が元どおりになった。6 そこでパリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちといっしょになって、イエスをどのようにして葬り去ろうかと相談を始めた。』

ここ、5 節で、『イエスは怒って…』とあるように、イエス様が怒られたということが分かります。一体、どうしてイエス様はお怒りになられたのでしょうか？…分かりますよね？イエス様は、パリサイ人たちの心があまりに頑ななので、怒られたのです！…今でも、イスラエルに行くと、安息日に関する戒めが実践されていますが、この当時はもっと厳しかったのです！安息日には、どんな仕事(労働)もしてはならなかったのです…。以前、「山上の説教」を学んだ時、皆さんにお話したように、それが直接、いのちに関わるような場合だけは別でした。…しかし、いのちに関わるような場合であっても、根本的な治療は許されず、最低限の応急措置しか許されていなかったのだそうです。…ですから、この時、イエス様が安息日に、緊急性の無かったような癒しをするというのは、明らかに、当時のパリサイ人たちの教え・言い伝えには反していたわけです。

確かに、神様はモーセを通して(十戒以前であろうが…)、安息日の規定(=安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ！これを汚すものは必ず殺されなければならない！)というものを定められました…。しかし、その…、神様からの教えのどこに、苦しんでいる人を手当てしてはならない、癒してはならない、善を行なってはならない、ってあります？…明らかに、当時のパリサイ人たちの理解やその方向性は間違っていたのです！まさしく、そういったことをイエス様は、『安息日にしてよいのは、善を行うことなのか、それとも悪を行うことなのか。いのちを救うことなのか、それとも殺すことなのか』と言われて、問い詰められたのです。だって、この時、パリサイ人たちのしようとしていたことは善ではなく、むしろ悪であり、それどころか、救い主として来られたイエス様を訴えて、殺すためだったでしょ！

だから、イエス様は怒られたのです！あまりにも、パリサイ人たちが頑なであったからです！…と言えますのは、彼らパリサイ人たちが神の前に悔い改めることをしないで…、自分のために、人をおとしめ…、取り返しのつかない罪を犯そうとしていたからです。彼らがしていたことは、神の教えを悪用して、実際にしていたことは、神様のみこころとは全く正反対のことであったからです。

イエス様を模範とする私たちも、罪に対しては、はっきりとした態度を取るべきです！それも…、誰かが大きな罪を犯そうとしているなら、なおさらです。ちょっと、皆さん。1 コリント 5:9-13 をご覧ください。『9 私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。10 それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。11 私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそ

しる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけな、いっしょに食事をしてもいけない、ということです。12 外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。13 外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。』⇒このように、みことばは、特に、教会の中で、特定の罪を犯し続ける者を責めるべきであることを教えてくれています。それが、所謂、「教会戒規」と言われるものです。…その人が本当に救われるために…、また、その人が罪から立ち返って、みことばに沿った正しい歩みをするように、一時的に交わりを絶つわけです。当然、その動機は、その人のことを愛するがゆえです…。

また、ローマ 2:5 にこうあります。『ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。』⇒このみことばも教えてくれているように、神は、悔い改めようとしない頑なな心に対して、怒りを持っておられます。それは、その人が救われることを願っておられるからです！

じゃあ、私たちはいかがでしょう？…確かに、他人の罪や人の頑なさに対して、腹を立てるかも知れません。…でも、それは、その人のことを想ってのことでしょうか？それとも、その人が自分に害悪を及ぼしたからでしょうか？あるいは、その人が自分に逆らってきたから？その人のことが気に食わないからでしょうか？…イエス様の場合、ご自分が悪く言われても…、あざけられても、言い返されませんでした。そういうことを、例えば、あのペテロは、イエス様の間近でずっと見ていたのです。これは、先週のメッセージでも引用したみことばですが、1 ペテロ 2:20-23 にこうありました。『20 罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだらと、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。21 あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。』⇒よくあるのは、私たちの怒りや憤りは、人が罪を犯したからとか、その人が神様の前に頑なであるからとかではなく…、自分に対して、何か嫌なことをされたからではないでしょうか？…どうか、何かで腹を立てた時、よく考えてみてください！「自分は今、何に対して、腹を立てているのだろう？果たして、この怒りは神様に喜ばれるものだろうか？」って…。

②マルコ 10:13-16⇒ 伝道 を妨げる者に対して…、高慢さ に対して…

どうぞ、今度は、マルコ 10:13-16 をご覧ください。『13 さて、イエスにさわっていただこうとして、人々が子どもたちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちは彼らをしかった。14 イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。15 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」16 そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。』

ここ、14 節に、『イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。…』とありました。どうして、イエス様は憤って、弟子たちを叱られたのでしょうか？⇒実は、この当時の人々は、自分たちの子どもを誰か偉い人の所へ連れて行って、その人に祝福してもらう、なんてことをしていたようです。ですから、この時も、子どもたちの親たちが、自分たちの子どもをイエス様に祝福していただくとしたのです。並行個所のルカ 18 章を見ますと、そこには『幼子』とありますので、恐らくは、3-4歳前後の子どもたちを中心とした集まりだったのでしょう。そんな幼い子どもたちを連れて、恐らく、両親たちがイエス様のところに来たのです。しかし、そんな時、イエス様の弟子たちは、イエス様を氣遣って、彼らを叱ったのだと思われま



しかし、ここ13節の、『(弟子たちは彼らを)しかた』という表現(ἐπιτιμῶ)は、非常に厳しい態度で相手をとがめることを表わすような言葉が使われてあります。ですから、弟子たちは、丁寧に、お断りしたわけではありません。「すみません…、申し訳ありませんが、イエス様はお疲れなので…」というような態度ではなかったのです。恐らくは、高圧的な態度で…、幼い子どもたちと両親たちを怒鳴りつけるような…、そんな態度であったのだと思われます。そういったことを、イエス様は注意されたのです。

だって、弟子たちは何もしていないでしょ！弟子たちが何か偉かったから、大勢が集まってきたわけでもないで、弟子たちが、何か立派なことをしたわけでもありませんでした。そうでしょ！…この時、人々は、イエス様に祝福してもらおうとして集まってきたのです。しかし、弟子たちは、何か功績があるわけでもないのに、偉そうに、子どもたちと親たちを恫喝したのです。だから、イエス様は弟子たちを叱られたのです！…それと、恐らくは、その子どもたちと親たちは、まだ救われてなかったからです。14節に、『子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。』とあります。また、15節でも、『…子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はい入ることはできません。』とありますが、ここで、イエス様は、「子どもたちは救われている」とはおっしゃっていませんでしょ？子どもたちは純粋で、無垢だから…、だから、救われているとは、みことばは教えません。先程、お読みしたみことばでも、『このような者たち…、子どものように…』とありましたように、そこには、何かしらの共通点があるはずなのですが、あくまでも、それは例えであって、子どもたちが救われている！とみことばが教えていないことに注目しておいてください。

確かに、小さな子どもたちのように、素直に、単純に、神様を信じ受け入れることが、救いには必要です。また、子どもたちのように…、自分の弱さや愚かさ、自分には全く功績がないということ…、それゆえに、私は自分で自分のことを救えない！ということ認める必要があるということ、イエス様は教えたかったのではないのでしょうか？…間違いないことは、イエス様は、そのような子どもたちや両親が救われることを願っておられました。しかし、弟子たちのしたことは、その子どもや親たちをイエス様から遠ざける行為であり…、しかも、そのような間違いを高圧的な態度で…、しかも、自分たちには何の功績も無いのに、高慢な態度を取ったので、イエス様は、そのことを弟子たちに叱られたと思われる。

皆さんは、いかがでしょうか？間違いなく、ここにおられるクリスチャンの皆さんは伝道…、つまり、人が救われるために祈り…、また、そのために助力しておられることと思います。しかし、私たちの心のどこかに、「自分は救われたから、もう良いや！」というような…、高慢と言うか、自己中心的な思いがないでしょうか？あるいは、福音を語って、人が真剣に聞いてくれないと、「せつかく親切に語ってやっているのに…」なんていう思いはないでしょうか？

間違いなく、聖書は教えてくれています、私たちが救われたのは、私やあなたに何か優れた点があったからではない、私やあなたが自分で真理を見出し、自分で、自分の罪の問題を解決できたのではない！って…。そうですよね。救いとは、如何なる行ないによるものではないし、私たちの側に、何か救われるべき理由があったからではありません。

だから、パウロは、コリントの教会に対して、こんなことを書き送りました。Iコリント 1:26-29、『26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんください。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。27 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者は、神は選ばれました。すなわち、有るものもない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。』

⇒前回の礼拝でも学んだように、本当に神様を知って救われた者は、自分が、どうしようもないほど、『心の貧しい者』(マタイ 5:3)であるということを知った者であるはず。人から馬鹿にされよう…、あるいは、人から見下されよう…、本当の自分は、その人が言う以下の者であるということを知っているはずなのです！私たちの怒りは、残念ながら、私たちのプライドや見栄から来ることが多いのではないでしょうか…。

また、ガラテヤ 6:1のみことばは、こう教えてくれています。『兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。』⇒このように、柔和な者というのは、自分自身の怒りを制御するだけではありません。様々な罪を正し…、人々の間で平和を作ろうとするような者のことなのです…。

### ③マタイ 21:12-13⇒神の 栄光 を汚す者に対して…

どうぞ、今度は、マタイ 21:12-13 をご覧ください。所謂、「宮きよめ」と呼ばれている聖書箇所です。『12 それから、イエスは宮に入って、宮の中で売り買ひする者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。13 そして彼らに言われた。「わたしの家は祈りの家と呼ばれる」と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。』

⇒ここでは、「イエス様がお怒りになられた…」というような表現はありません。しかし、ここでのイエス様の行動は、ひよっとしたら、誤解を招きやすいかも知れません。…と言いますのも、イエス様がエルサレムの神殿で暴挙を働いているように見えるからです。しかし、当然、この行為にも正当な理由がありました。…この当時、神殿では不正が公然と行なわれていたのです。例えば、宮への納入金は、ユダヤの貨幣であるシケルで納める必要があったのですが、各地に離散していたユダヤ人たちは、外国の貨幣をシケルに両替しなければならなかったのですが、両替人たちは、その足元を見て、暴利をむさぼっていたのです。また、鳩も同様で…、遠く外国から来る者たちは、なかなか捧げ物を持って、来ることはできませんでした。ですから、そこで、捧げ物が売られていたのですが、これもまた、足元を見て、非常に高い金額で、鳩が売り買いされていたのです。…だから、イエス様は、そんな商売人たちに対して、『あなたがたはそれ(＝神殿)を強盗の巣にしている！』と言って、叱られたのです。…と言うのも、神殿とは、神の栄光が1番に意識されるべき場所であるはずで…、皆は、そこで礼拝を捧げるために来ていたからです。…なのに、そんな所で、人々の欲望が野放しにされ、神様の栄光が汚されていることに、イエス様は怒られたのです。

私たちはどうでしょう？先程から何度も申し上げていますが、皆さんは、自分のプライドが傷付けられた時、あるいは、自分が何かイヤな思いをした時、あるいは、何か損をした時と…、神の栄光が汚された時の、どちらに対して、より不満や怒りを持つでしょうか？神様のこと…、イエス様のこと…、教会のことは馬鹿にされてもまあまあ平静でいられるが、こと、自分のことを悪く言われたり…、自分の家族のことを悪く言われたりすると我慢ならないなんて…、聖書的に見て、バランスが悪いと思われませんか？…でも、ある意味、感謝なのは、実は、こういったことから自分がどんなことで心を乱され…、怒りを覚えるか…、自分でもなかなか気付かなかったような…、自分自身の偏った考え方や価値観を知ることができるのです。そうして、自分の弱さや至らなさを知ることによって、それを悔い改めることができるし、それが私たちの霊的な成長に繋がっていくのです…。

### ④ヨハネ 11:32-38⇒死と、罪や悲しい 運命 に対して…

どうぞ、最後に、ヨハネ 11:32-38 をご覧ください。『32 マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかると、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょ

うに。」33 そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちが泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、 34 言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」35 イエスは涙を流された。36 そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」37 しかし、「盲人の目をあけたの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか」と言う者もいた。38 そこでイエスは、 またも心のうちに憤りを覚えながら、墓に 来られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。」

ここでは、『憤り』という言葉が2回使われていました。…33節と38節です。これらのみことばをご覧ください。だきますと、イエス様の憤りと言っても、イエス様が憤りを覚えられたのは、特定の誰かではないようです。恐らく、イエス様が憤りを覚えられたのは、死に対してです。また、死の背後にある、罪の恐ろしさや死ぬべき運命？に対する憤りではないでしょうか！だからイエス様は、ここでは、誰に対しても、その憤りを向けておられないのです。むしろ、イエス様のその思いは、涙となって現われていることが分かります。

### <励ましの言葉>

実は、最後になってしまっただけで申し訳ないのですが、ヘブル語の、「柔和」(ἡπιότης・アーナーウ)という言葉の本来の意味は、「卑しい」とか、抑圧された奴隷状態にあることを指す言葉で、そこから転じて、自分が神の貧しいしもべであるが故に、神のみこころに服従し、それ故に、隣人に対しても怒りや傲慢な思いを抱かない状態を指すようになったのだそうです。…何だか、前回に学んだ、「謙遜」という言葉のイメージと似ていますよね。

みことばはどのように教えます。ローマ 12:15-17、『15 喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。 16 互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思つてはいけません。 17 だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。』⇒このように、本当に謙遜になった人間は、人を見下しません。…それだけでなく、その人の思いに共感するようになるのです。『喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣く(こう)』とするのです。そういった者たちは、困っている人や虐げられている人たちに同情し、何とか、助けの手を差し伸べようとするのです。

確かに、私たちが、この世で生きていく時、いろいろな出来事に遭遇します。あのイエス様がそうであられたように、時には、正当な怒りを持つべき時があります…。また、あまり言いたくないことや厳しいことでも、勇気をもって言うべきことがあるでしょう。しかし、聖書のみことばは、こうも教えるのです。先程の続き、ローマ 12:18-21 には、こうあります。『18 あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。 19 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」 20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。 21 悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。』⇒このように、聖書は、すべての怒りを、必ずしも、罪であるとは教えていません。でも、明らかに、聖書は教えます、「復讐は罪である！」って…。何故なら、それは、神様の領域だからです。神様が御命じになられるのは、「例え、それがあなたの敵であっても、善を施しなさい。悪に対して、悪で報いてはならない！かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい！」ということです。

また、エペソ 4:26 のみことばは、こう教えます。『怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤つたままでいてはいけません。』⇒このみことばが教えてくれている通り、怒りを持つこと自体は罪ではなくて

も、その怒りを継続して持ち続けることは罪です。神様が、すべてのことは御存知で、神様にお委ねすることが、私たちクリスチャンにはできるのです。

また、ヤコブ 1:19-20 のみことばは、こう教えます。『19 愛する兄弟たち。あなたがたはそのことを知っているのです。しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。 20 人の怒りは、神の義を実現するものではありません。』⇒ここでも、『怒るにはおそいようにしなさい。』とあるように、怒りは、必ずしも罪ではありません。しかし、怒りというものは注意…、また、警戒すべきものです。怒りというものを私たちが正しく理解し…、それを正しくコントロールしないと、私たちの1番の目的である、神様の義を…、キリストの証しを損なってしまうことが十分有り得るからです。

どうぞ、今日のメッセージを聞いてくださった皆さんが、聖書の教える、本当の『柔和』というものを知ってくださって、益々、キリストに似た者となっていくことによって…、神様のみこころがなされ、神様の栄光がもっと現わされていくことを期待いたします。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。